

2021/01/17

ヨハネの福音書 講解メッセージ③③

『ラザロの復活 I』 ヨハネ 11:1-19

これまでの場面は、イエス様とユダヤ人とのやり取りだったので、話題の中心は、イエスがキリストかどうかということでした。結局、彼らはイエス様を神の子とは信じず、殺そうとしたため、イエス様はエルサレムを脱出し、ヨルダンの川向こうにやってきました。ここから先は、イエス様を神の子と信じる人たち、つまりクリスチャンとのやり取りが中心です。クリスチャンが注意すべき点がわかります。

■主の訓練

「さて、ある人が病気にかかっていた。ラザロといって、マリヤとその姉妹マルタとの村の出で、ベタニヤの人であった。このマリヤは、主に香油を塗り、髪の毛でその足をぬぐったマリヤであって、彼女の兄弟ラザロが病んでいたのである。そこで姉妹たちは、イエスのところに使いを送って、言った。「主よ。ご覧ください。あなたが愛しておられる者が病気です。」イエスはこれを聞いて、言われた。「この病気は死で終わるだけのものではなく、神の栄光のためのものです。神の子がそれによって栄光を受けるためです。」（ヨハネ 11:1-4）

マリヤは、弟子の中でも、最も神を愛する人の一人であることが説明されています。このマリヤがどのような信仰を持っていたかは、後ほど明らかになります。

さて、マリヤには、マルタという姉妹とラザロという兄弟がおり、このきょうだいは三人ともイエス様を信じ、イエス様と親しい関係にありました。ですから、ラザロが重病になったとき、マリヤとマルタはイエス様に来ていただきたいと思って使いを出したのです。

この時イエス様は、「病気は神の栄光が現れるためのものである」と語っておられます。病気のようにつらい目に遭うと、私たちは「これは罪の罰なのではないか」と考えてしまいがちです。しかし、神様は罪に対して罰を与えることはありません。神の正義は、罪を犯した者を罰するのではなく、罪人から災いを取り除くものです。この世には、罪に対しては罰があるものという前提がありますが、聖書のどこにもそんなことは書かれていませんから、聖書を人間の物差しで読んではいけません。イエス様が十字架に架かったのは、死を滅ぼし、私たちから罪を取り除くためです。神はあなたを愛し、その愛によって自発的に変わることを信じているのです。恐怖で人を是正しようとするのは、この世の考え方です。罰を受けたところで、人をねたんだり、怒ったりする本質は何も変わりません。ただ抜け目なくなって、人から良く思われる行動を取れるようになるだけです。私たちを変えることができるのは、神の愛だけなのです。そのために、私たちを苦しめている災いを取り除くのが神の正義です。災いは神からのものではなく、神が取り除いて神の栄光を現すためのものです。

「イエスはマルタとその姉妹とラザロとを愛しておられた。そのようなわけで、イエスは、ラザロが病んでいることを聞かれたときも、そのおられた所になお二日とどまられた。」(ヨハネ 11:5-6)

イエス様は、「ラザロを愛していたので、その地に二日とどまった」とあります。この先を読むとわかりますが、この間にラザロは死んでしまいます。もちろんイエス様にはわかっていたことですから、愛していたからこそ、彼が死ぬのを待っていたことになります。

私たちは、神は困っている人を助けてくれるものと思っていますが、ここでは静観することに神の深い思いがあったわけです。イエス様は、私たちが期待するよりも、もっと大きなことをしようと思っておられたのです。もし私たちが「私の願いを無視するなんてひどい」と言って、自分の考えの中に神を収めようとする、と、神様と正しい関係を築くことができなくなります。神様の関心は、私たちが神をどれほど信頼できるようになるかにあります。イエス様はラザロを愛しているからこそ、その信仰を訓練して育てるため、あえてその地にとどまられました。

「すべての懲らしめは、そのときは喜ばしいものではなく、かえって悲しく思われるものですが、後になると、これによって訓練された人々に平安な義の実を結ばせます。」(ヘブル 12:11)

「懲らしめ」とは、愛するものを訓練することです。親からすると、黙って見ているのはつらいもので、手を出して助けるほうがずっと楽です。しかし、思慮深い親は、子どもの成長を願って、あえて黙って見守るのです。

■神が与える自由

「その後、イエスは、「もう一度ユダヤに行こう」と弟子たちに言われた。弟子たちはイエスに言った。「先生。たった今ユダヤ人たちが、あなたを石打ちにしようとしていたのに、またそこにおいでになるのですか。」(ヨハネ 11:7-8)

ラザロの住むベタニヤはエルサレムの近くにありました。二日たち、時が来たので、「ラザロのところに行こう」とイエス様は言われたのです。しかし、エルサレムには、イエス様のいのちをねらうユダヤ人たちがいます。心配する弟子たちに、イエス様は次のように言われました。

「イエスは答えられた。「昼間は十二時間あるでしょう。だれでも、昼間歩けば、つまづくことはありません。この世の光を見ているからです。しかし、夜歩けばつまづきます。光がその人のうちにはないからです。」(ヨハネ 11:9-10)

「光」とは、真理である神ご自身を指します。真理を見上げて生きるならつまづくことはないけれど、真理から目をそらすと危険なのだといエス様は言われました。

現代では、個人が自由に配信できるようになり、うそかもしれない情報があふれています。何が真実か見えにくい時代にあっても、私たちはイエス・キリストという方は真実であり、イエス様のことばにうそ偽りはないことを知っています。ですから、イエス様のことばをしつかりと受け止めて生きるなら、つまづくことはありません。

いつまでも残るものは、神の真実だけです。それは愛です。真実の行動は、人を愛し、さばきません。さまざまな情報に振り回されることなく、真理に目を向け、いつまでも残るものに心を留めて生きていきましょう。

「イエスは、このように話され、それから、弟子たちに言われた。「わたしたちの友ラザロは眠っています。しかし、わたしは彼を眠りからさましに行くのです。」

(ヨハネ 11:11)

イエス様は、ラザロのところに行く目的を弟子たちに告げました。神がなさることには、すべて目的があります。それは同時にあなたには目的があることを示しています。あなたは神様に自分の目的、役割を聞いたことがありますか。賢い人は、神様に自分の役割を聞きまします。その役割を果たそうとして生きる人はつまづくことはありません。

神に聞き従って生きることは自由がないのではなく、本当の意味での自由な選択ができる生き方です。というのは、私たちが自分で選択していると思っているものは、すべて過去の因果関係によって選択させられているものだからです。つまり、あなたが何かを選ぶ時には、何かしら過去に出会ったものにきっかけや原因があるということです。そして、この世界は有限であり、この世のものはすべて死に向かっています。因果関係によって選択したものは、この地上のものであり、すべて死に向かっているのです。

これに対して、神の思いを選択するということは、過去の因果関係から独立することです。神があなたの心に起こした願いを選択するならば、それは因果関係から独立したものなのです。神との関係を理解し、神様が自分に抱いておられる目的や役割を理解して、神に仕え、自分がやるべきことをやっていくということは、過去に縛られずに神との関係だけで生きるということです。それが、因果関係に支配されずに選択する、唯一の自由な生き方なのです。なぜなら、神だけが自由だからです。神は、時間にも空間にも死にも支配されません。神は愛です。愛は無限です。神が教えてくれた愛を実行しようとするところには深い関わりが生まれ、無限の可能性が生まれます。これが自由なのです。神の思いを知り、それを選択すること、これが本当の自由です。ぜひ神様にあなたを造った目的を聞き、本当の自由を手にしましよう。過去にしばられ、過去に支配される生き方ではなく、神に土台を置き、神の思いを選択するとき、あなたの心は言いようもない平安を手にしまします。

■弟子の勘違い

「そこで弟子たちはイエスに言った。「主よ。眠っているのなら、彼は助かるでしょう。」しかし、イエスは、ラザロの死のことを言われたのである。だが、彼らは眠った状態のことを言われたものと思った。そこで、イエスはそのとき、はっきりと彼らに言われた。「ラザロは死んだのです。わたしは、あなたがたのため、すなわちあなたがたが信じるためには、わたしがその場に居合わせなかったことを喜んでいきます。さあ、彼のところへ行きましょう。」そこで、デドモと呼ばれるトマスが、弟子の仲間に行った。「私たちも行って、主といっしょに死のうではないか。」

(ヨハネ 11:12-16)

弟子たちがイエス様の言葉を理解できなかったので、イエス様はその意味を解き明かしました。「眠っている」とは「死んだ」ということであり、「眠りから覚ます」とは「生き返らせる」ということだと説明し、弟子たちの信仰が成長するチャンスであることを喜んでいてイエス様は語っておられます。

このように、神様はよく比喩的表現を使われます。つまり、神のことばには表面的な意味のほかに霊的な意味を持ったものが多いのです。

さて、イエス様はその比喩を解き明かし、「死人をよみがえらせに行く」とはっきり言われましたが、弟子たちには意味がわかりませんでした。これまでは、イエス様とユダヤ人の間で会話が成立せず、ユダヤ人が怒ってイエス様を殺そうとするところにまで発展してしまいましたが、弟子たちとの間にも同じことが起きているのです。なぜでしょうか。

それは、ユダヤ人の時と同様に、弟子たちも、イエス様の言葉を信じようとするのではなく納得しようとしていたからです。信じることは信仰が担当し、納得することは理性が担当します。弟子たちは、イエス様のことばに納得しようとしていたため、理性が働き、「死んだ者が生き返るなんてあり得ない→イエス様は死ぬ覚悟だ」と受け取りました。これが理性による最大限の返答だったのです。

人は、神様と理性で関わろうとしますが、神様との関りに理性を持ち込むことはできません。神様との関係は、神のことばを信じる信仰で築いていくものだからです。

■人は真実を認識できない

なぜ弟子たちは、納得することが信仰だと勘違いしたのでしょうか。それは、私たちが真実を認識できると錯覚しているからです。私たちが認識できるのは、「真実」ではなく「現象」です。ところが、人は理性で真実が認識できると思っているのです。神のことばも理性で理解できると思い込んでいます。だから、理解できなければ信じない、と考えるわけです。それほどまでに、人間は自分の理性は絶対だと錯覚しているのですが、実際は、人は真実を認識することはできません。

たとえば、「アキレスの亀」という話があります。俊足で有名なアキレスが亀を追いかける

のですが、亀が最初にいた地点にアキレスが着いたときには、亀は少し先に進んでいます。その地点にアキレスが着いたときには、亀はまたその少し先に進んでいる・・・というように考えると、アキレスはいつまで経っても亀に追いつくことはできないことになります。ですが、それは理屈上の話で、現実にはそんなことはあり得ません。

あるいは、「国境線は存在できない」という話があります。私たちは数学においては「線」というものを知っています。線に面積はありません。面積のあるものは、面と呼ばれます。つまり、線を知っていても書くことはできないのです。私たちが書くことができるのは、すでに「面」だからです。この地上に面積のないものは存在しません。では面積を持たせればよいのかというと、面積を持った瞬間、それは線ではなく面になってしまいます。つまり、「国境線は存在しない」ということになるわけです。

何が言いたいかというと、私たちは何かを認識できていると思っても、実はそれは認識できていないということなのです。自分は何かを知っていると思っても、それは真実を認識できているわけではないのです。

いったい誰が自分の中に神が共におられることを認識できるのでしょうか。誰にもできません。それが認識できないのは、この世界が死というものに条件付けられ、有限の中でしか物事を認識できないからです。この世界には時間と空間があり、広さ・面積を持たないものを認識することはできません。神は霊ですから大きさはなく、時間の流れの中にもいないので、人は神を認識できないのです。

このように、人は真実が認識できていないのに、自分の認識が正しいと思っています。誰もが自分の理性を信じてすべてを認識できると思っているのです。

聖書は、「誰も知恵によって神を知ることはできないのが、神の知恵である」と教えています。私たちは神を知りえないので、神の前にへりくだり、神のことばを信じるしかありません。しかし、人間的標準がそれを妨げ、人はなかなか神の前にへりくだることができません。ラザロの復活は、それがわかっていない弟子たちの人間的標準を壊し、神のことばを素直に信じる者に変えようとするものだったのです。

■神のことばにへりくだる

あなたを苦しめているのは神ではなく、真実が見えていないことです。人は本来神を見ることができ、真実も見えていましたが、死という制約の中では、神を見ることはできないので、真実を見ることもできません。しかも、その自分を真実な自分だと思い込んでいるために、自分や人を責めるのです。

神の目には、私たちは皆、死という病気に閉じ込められている状態です。それが真実の姿ではないことを教えるために、イエス・キリストは地上に来られたのです。

イエス・キリストがこの地上に来られたのは、いのちを与えるためです。人が命を差し出すことができるのは、かけがえのない相手だけです。イエス様にとって、あなたはそうなのです。イエス様はあなたのために十字架に架かりました。「十字架以外に誇りにするものがあるてはならない」とは、できない自分の姿を見て責め続けてはいけないということです。で

きない自分は本当の姿ではないからです。イエス様にとって今の私たちは、死の中で苦しんでいる病人です。あなたを本来の真実な姿を教えるために、イエス様は来られました。イエス様のことばを素直に信じましょう。

「それで、イエスがおいでになってみると、ラザロは墓の中に入れて四日もたっていた。ベタニヤはエルサレムに近く、三キロメートルほど離れた所にあった。大ぜいのユダヤ人がマルタとマリヤのところに来ていた。その兄弟のことについて慰めるためであった。」(ヨハネ 11:17-19)

イエス様は、弟子の思い違いを解こうとはしませんでした。自分で実際に体験し、自分は無力だと気づくと人は神の前にへりくだるようになり、絶望すると神を頼るようになります。神様は私たちが絶望し、本当の自分の姿に気づくようになることを願っておられます。ですから、神様は私たちに対しても、時折患難を静観なさることがあるのです。

クリスチャンであっても、理性を主役とする時、神様との間に会話が成立しないことがあります。私たちの主役は信仰です。罪と戦うとは、神のことばを素直に信じようとする事です。たとえ不信仰に負けてしまっても、その時はただ神様に助けてと言えればいいだけです。こうして神の栄光を見ると、信仰だけがまことの平安と自由をもたらすと知ることができます。